「日々の理科」（第 3200 号） 2023,-5,11

「ヒミズの観察（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

今年の大型連休も、北軽井沢の山荘に友人家族が泊まりに来てくれた。お子さんが４人もいて、みんな山荘裏庭の森が大好きだ。しかし今年は裏庭の巣箱にフクロウが営巣中なので、むやみに近寄れない。

裏庭に設置してあったアスレチックは、全部表庭ガレージと玄関前に移設しておいた。ガレージにはハイジブランコ、ターザンロープ、ハンモック、はしご登りなどがあって、子どもたちはほとんど一日中遊んでいた。

それでも、森の中も歩きたいというので、山荘向いのカラマツとモミの森を歩くことにした。この土地は知人の所有なのだが、建物を建てる予定はなく、結構自由に歩き回ることができるのだ。今の時期は下草も丈が短く、歩きやすい。

しばらく歩くと、林床に黒いものが落ちていた。私は「キツネの糞があるから気を付けて！」と、子どもたちに注意して通り過ぎた。しかし、子どもの一人が「これ、ネズミみたいだよ」と言う。

確かに糞ではなく動物だ。死んで間もないようだ。よくフクロウの餌にならなかったと思った。

よく調べてみようと思い、山荘のテラスに持ち帰った。こういう動物の遺骸はむやみに触ってはいけない。病原菌が原因で死んだ可能性があるからだ。形状からネズミではないことはすぐにわかった。尾までの長さは約 10cm。鼻と前後肢の形状などから判断すると、モグラの仲間の「ヒミズ」という小動物のようだ。